12月)。なおこの共同研究に，この年度から女性メンバー（院生他）が増えてきた。今後，女性治療者の特質をも検討しながら，更に共同研究を発展させたいと考えている。当面は，臨床ケース検討を定期的に行っていくことが必要である。またその成果を書物にしたいと考えている。

また，学部全体で共同研究として取り組んできた“教育'60年代研究”にも，われわれは参画し，臨床的知見を加えることができた（「臨床場面で接した現代青年の内面的構造」三枝孝弘・田畑治編『現代の児童観と教育』Ⅲ部3章，福村出版，57年6月，274−298頁所収)。

4. グループ・アプローチ，エンカウンター・グループの実践研究。

本学学生相談室主催の第6回自己発見のための合宿セミナーが開かれ，今回もファシリテーターとして参加した（「懐しの蓼科でのグループ合宿」昭和57年度厚生補導特別企画，名大学生相談室発行，58年3月，17−30頁所収)。学生の集中的グループ経験の意義は，大学在籍期間中という限られた年限内に，如何に対人関係をみつめなおし，かつ自己再発見をなしうるかにあろう。この年のグループでは，同一学部からの“顔見知り”の仲間が多い場合にどのようなことが起りうるかについて，貴重な体験ができた。今後，民間でのグループ，オープン・エンカウンター・グループ，ウィーク・エンド形式のものなどとの比較・検討をすることが残されている。データとしてのメモ記録はあるが，まだ醞釀中である。

5. 特定研究「わが国における人間関係の比較的・総合的研究」では，教育臨床班は，さまざまな条件のために開店休業の状態であった。

6. その他の活動など。

「親と子をめぐる問題——大学の教育臨床の立場から——」東海心理学会第31回大会シンポジウム発題，57年5月，名城大学教職課程部，抄録集69頁。

「おちこぼれ——心理臨床の立場から——」日本心理学会第46回大会シンポジウム発題，57年7月，京都大学，S16頁。

「子どもの“よさ”を知ることと“はげまし方”」児童心理，12月号（36巻13号)，40−47頁，57年12月。

（昭和58年8月31日記）

昭和57年度研究経過報告

若林　満

1. 研究活動と学会報告

現在当研究室を中心に以下7つのプロジェクトが進行中である。第1は昨年度からの継続の，女子短大生の職業自己像と職業選択に関する研究で，本年度は後藤宗理・鹿内啓子先生と協同で，職業レディネス・自己能力評価・職業志向などの新しい尺度を開発し，女子大生における自己概念と職業意識の関係が調べられた。この研究の成果は本年度の日本心理学会および東海心理学会において発表された。第2に上記研究の延長として，「キャリア発達研究会」が中心となって，主に男子大学生を中心に職業意識の研究が進行中である。東海4県の主要国立大学へ昭和58年度に入学した大学生約2,500名から質問紙によるデータが収集され，目下分析中である。このプロジェクトは，本年度名古屋大学教育学部に入学した新入生の，学生生活をつうじての職業意識の変化と職業選択過程を，縦断的に研究することを本来の目的としている。第3に，やはり昨年度からの継続で，冨安玲子・湯川隆子先生や職場の代表委員との協力のもとで，愛知県婦人労働サービスセンターの委嘱を受け，民間企業における女子労働力の育成と活用に関する調査研究が行われた。研究結果は日本心理学会と愛知県産業労働懇話会において発表された。第4に，以前行われた「わが国産業組織における大卒新入社員のキャリア形成に関する研究」の follow-up が試みられた。分析の結果，本人の潜在能力と入社3年目までの組織での経験（特に上司との垂直的交換関係）が，入社7年後のキャリア結果（昇進・給与・能力評価など）を強く規定していることが見い出された。この研究の結果は本年度の組織学会および The Second Japan-US Business Conference で発表された。

第5に目下データ取得中の研究として，アイオワ大学の D. Gallagher 教授との，働く人びとの組織忠誠心

に関する共同プロジェクトがある。この研究では現場の従業員を中心に，会社・組合・作業集団へのコミットメントの相互依存関係が問題とされている。現在，日米比較の視点からデータの分析が進行中である。第6として，石田科学経済研究財団からの研究助成を受けた「わが国産業組織における管理職のキャリア形成に関する実証的研究」が進行中である。この研究では，愛知県下のいくつかの企業で働く管理職を対象に，キャリア形成の規定要因とキャリア形成パターンの究明が試られている。第7として，「職場のリーダーシップと仕事のやりがい」と題したリーダーシップ研究がある。この研究では，民間企業・愛知県職員・大学生のクラブ活動を中心に質問紙によるデータが収集され，目下分析が進行中である。リーダシップ次元としては，リーダーの部下一人一人への働きかけ（個人志向）と，集団全体への働きかけ（集団志向）の2つに焦点が当てられている。

2. 執筆活動

女子短大生の職業意識に関する研究は，後藤宗理・鹿内啓子先生との共同論文として，本紀要にまとめられた。また，愛知県婦人労働サービスセンターでの調査結果をもとに，民間企業における婦人管理・監督職のキャリア形成に関し，冨安玲子・湯川隆子先生との共同でやはり本紀要に論文としてまとめられた。なお，県サービスセンターでの仕事は冨安・湯川先生との共同執筆で2つの報告書としてまとめられた。その一つはインタビュー調査に基づいて執筆された「婦人の管理・監督職に関する研究――キャリア形成に関する面接調査」であり，第2は「婦人労働力の管理と育成に関する調査―民間企業における実態と管理者の意識」である。加えて，これらの研究結果の要約は「民間企業における婦人管理・監督職の地位形成」と題して，「あいちの労働経済」(№30)に掲載された。先のJapan-US Conference での発表は，原稿を修正したものが，同ConferenceのProceedingsの論文として採用された。更にこの結果を発展させ，「The Japanese Career Progress Study : A seven-Year follow-up」と題し，シンシナティ大学のG. Graen教授との共同論文として，JAPに掲載がきまった。リーダーシップ研究の結果は，一部「行政組織におけるリーダーシップ」と題して「職員あいち」(№38)に発表されたが，本格的なまとめはこれからである。昨年来の「経営の心理」(佐野守先生との共編，福村出版)がようやく今秋出版のはこびとなった。なお，今までの女性と職業に関する研究をまとめる形で，「女性の自立と社会進出」(仮)(福村出版)の編集作業が進行中である。

(昭和58年8月31日記)

研　究　経　過　報　告

池　田　博　和

1. 永年とりくんできた青年期の「病理と心理療法」論について，残念ながら未だ十分に体系だてて理論化できるまでには思索がねれていない。これまでに公表できたのは，その体系の一契機となる，いわば各論の一々にすぎないものであるが，そのようなものとしては次の二・三があげられる。

1）村上英治教授，渡辺雄三氏との共編になる『心理臨床家――病院臨床の実践――』(誠信書房，1982)に「ある青年期危機症例の心理療法過程」と題する一章を執筆した。この症例は「自明性の喪失」と頻繁な自殺企図とを主訴とした「分裂病性反応」ともいいうる女性であるが，その心理療法過程を追うなかで，「支持」的であることが即「受容」となりうるような絶対的受容の姿勢が治療的態度として重要であることを強調した。

2）「青年期危機への現存在分析的接近」(村瀬孝雄編『講座・心理療法の実際8，青年期危機』福村出版)この原稿自体は，すでに数年前に脱稿したものであるが，ようやく校正を終えることができたので，この秋には刊行される予定である。ここでは，重症強迫神経症の症例を通して，心理療法の諸接近のなかでも「現存在分析」的な立場の特質について述べた。

3）昨年度の本紀要には，田畑治助教授ほかとの共同研究として「臨床青年心理学研究X，青年期治療の内的視点」をまとめることができた。このなかでは，さきにあげた絶対的受容ということと治療者役割行動の具体的なありようとの関係についてふれておいた。